巻頭言

ひとりを大切にすることは、社会に存在する皆を大切にすること

北出 順子（福井大学准教授／協同総研理事）

1．あらゆる垣根を越える協同労働

「よい仕事研究交流全国集会2023」に参加し、第14分散会を担当した。最初にセンター事業団矢板地域福祉事業所の報告があった。人口約30,000人の矢板市での活動は多岐にわたり、放課後等デイサービス、公営住宅における365日の安否確認事業など多くの事業に取り組んでいる。この安否確認に関する事業の出発点は、障がいを持つ高齢女性が夫を亡くし、これまで夫が全てをやってきたことで本人ができることが少なくなっていたことにあった。しかし、これがこの人の人生である。一人ひとりが持つ具体的なエピソードから、多くの人にもメリットをもたらすものを見つけ、還元していくこと。新しい仕事を創り出すきっかけとなっていた。

続いて豊島区のとしま宙事業所の報告があった。３つの事業について詳しくお聞きした。１つ目は18～39歳の総合相談窓口、２つ目はフレイル対策センター、３つ目は第二層生活支援コーディネーターの受託である。いずれも豊島区の委託事業と理解したが、筆者が勤務する福井県ではこれらを民間団体等に委託して実施している市町村は皆無である。小規模の自治体において、直営でない場合は社会福祉協議会等に委託して実施することは多いが、民間に委託しているところは決して多くないだろう。行政が主体であるものを協同労働で支えることができると学べたことは最大の収穫であった。

保健師である筆者が述べることは烏滸がましいが、近年は地域資源の開発と実際の支援の提供を分けて検討していくことも推奨されている。しかし、１人ひとりの事例から必要な資源が検討され開発されていくことが、地域の実情に合わせた解決策となるのであり、住民に近くある人たちが気づくことからスタートすることが望ましい。このようなことから、地域資源の開発と支援の提供を分けて考える場合は、いかに連動させていくかが課題であろう。しかしながら協同労働は、障がい、高齢、こども、年代、自分自身の特性…あらゆるものを越える可能性を持つ。これらの壁もまた、やすやすと越えていくのではないだろうか

2．「他者のこと」が「自分のこと」となる転換点

本報告のタイトルとした「ひとりを大切にするということは、社会に存在する皆を大切にすること」は、仕事を創り出す原点といえる。しかし、単に他者が置

かれている状況に心を寄せることや、他者に共感することは多くの人が既に体験していることであろう。一歩進んで他者のことを自分のこととして考え、行動する。ここが仕事として成り立つかどうかの分かれ道なのではないだろうか。文字にすると非常に簡単に見えてしまうが、他者の役に立つために行動することは、わかっていてもできないと考える人の方が多いと思う。しかしなぜ仕事にしようと考え、行動するに至るのであろうか。このことは毎年の分散会で感じることなのだが、今回は、他者のことが自分のこととなる転換点があるのではないだろうかと思い至った。

ある個人がそこに所属し、帰属感や愛着心をもち、そこに所属する人々を『われわれ』として意識しうる集団*1のことを内集団とよぶ。すなわち、自分はその一員であると認識している人たちであり、他者の悩みや困りごとを自分自身のこととして自覚するきっかけとなっていると考えられる。内集団は一般的に自分たちの集団は他の集団よりも優れているという意識が芽生えやすく批判的に解釈されることも多いが、ここで述べたいことは、弱者だから支援するのではなく、共通の場(本事例の場合は同じ地域)に生きる人として共属の意識を持ち合っていることである。場を共にし、意識を共にしながら働くので、働くことそのものに自分自身の意志や行動を込めることができる。そして働くことで、自分自身の価値を世に知らしめることにつながるのではないだろうか。

3.「よい仕事」の始まりはひとりを大切にすることから

このように考えると、「よい仕事」とは、豊かな暮らしを自らの力(実際にはひとりの力で成し得るものではないので、「自分たちの力」なのであろうが)で生み出していくことで、その方法論として、ひとりの事例から課題を抽出し解決をはかることで、それが多くの人にもあてはまる解決策になっているのではないか、という仮説が生まれる。すなわち、ひとりを大切にすることは、社会に存在する皆を大切にすることである。

本分散会では福祉や介護保険・介護予防に関することが主な報告内容であったが、初日のセッションでは健康づくりや環境づくりにまで「よい仕事」が広がっていることを目の当たりにした。今後はさらに事例を集め、抽象化していくことの必要性を感じると同時に、協同労働が持つ可能性に畏れいるばかりである。

*1 森岡清美編,『新社会学事典』, 有斐閣, 1993